一年

僕がアンネの生き方について学んだことは、自分が自由に生きていくことができない中で平和を求め、たくましく生きようとする姿です。自分が気楽に過ごしていた学校時代が去り、地獄のような時代がやってきたとき、自分がいつ死んでもおかしくないときの中で日記を毎日書き続け、平和や他人の幸福を求めて、そして、自分はたくましく生きようとする姿が僕はすばらしいなと思いました。しかし、アンネの生涯は短い時間だったのがとてもざんねんだなと思いました。

一年

私は「アンネの日記」を読んで、その前向きな精神に感動しました。

アンネ・フランクの言葉に「希望があるところに人生もある」というものがあります。彼女は、ナチスによるユダヤ人への迫害のため、恐怖におびえる日々を送っていました。この言葉は、そんな中でも幸せを見いだそうとしたアンネだからこそ言えることだと思います。

私は、このアンネの生き方を自分自身と重ねてみました。比べてみると、私はいつも小さなことで落ち込んでしまっていると思います。そんな時こそ、強い気持ちを持って、まだ私の中に何か美しいものが残っているということに気づくことが大切です。

アンネ・フランクは、私に希望を持ち続ける生き方を教えてくれました。

コクヨ　ケ－10　20×20

私はアンネの生き方について二つの事を考えました。

まず、一つ目は、捕えられても明るく希望を持ったということです。希望をもって、日記に書き残したことで、差別などひどい出来事をこの世の中に広めることができたと思います。アンネは、不安もあるけれどわずかな可能性を信じて前を向いていたんだなと、思いました。

そして二つ目は生きていく中での目的は、幸せになる事と言っていたことです。私は、この言葉を聞いて、本当にそうだなと思いました。小さな目標も全てふくめて「幸せ」につながるなと思いました。

これから私は、アンネがのこしてくれたことを忘れず、どんな事でも前向きにすごしたいと思いました。

コクヨ ケ−10 20×20

一年

　私が、今日アンネ・フランクについて学習して一番に思った事は何でこんなに自由な考えや素晴らしい感性を持った子が悲惨な戦争で殺されなければならないのかということです。アンネはどんなに厳しい状況でも笑顔で前向きに考えていたと先生から聴き、私は彼女に対する尊敬の思いがこの学習をする前より大きくなりました。なぜなら、もし私がアンネの立場だったらと考えると不安と恐ろしさ、悲しみなどで毎日泣いていると思うからです。そう考えると、やはりアンネは芯が強くて、負けず嫌いな女の子なんだなぁと思いました。

　このように、常に人間らしく生きることや平和の大切さを求めていたアンネの一生を学んで私はこれから、アンネのことを次の世代に語り続けていきたいと思ったしアンネのような前向きで素晴らしい心を持った人になりたいなぁと思いました。また、アンネについてもっと詳しく調べてみたいと思いました。

一年

　私がこの一時間で感じたこと、考えたことは、まずアンネの生きた時代のひどさ、残酷さです。ユダヤ人への人種差別、障害者の人達を八万人も殺害するなどという現代ではありえないことでビックリしました。そしてそれを指揮するヒトラーの権力の強さで、ここまでになることに正直おかしいと思いました。しかし、そんな中でも、一生懸命生きるアンネの強さ、そして夢である、ジャーナリストか作家への希望をあきらめない姿に感心され、アンネの日記に書いてあった「幸福な人は誰でも、他人をも幸福にするでしょう。勇気と信念のある人は、決して不幸の中で死にはしません」というのに、本当にそうだなと実感しました。

　私も、このアンネのように平和を祈り自分の意志を持ち生きていきたいです。

コクヨ　ケ－10　20×20

二年

　私は、アンネの人生を知り、一つだけ思ったことがありました。
"アンネのようになりたい"
ということです。アンネの父であるオットーは、ヒトラーの人種差別法のあまりのひどさに、「私はもうこれ以上語りたくない…」と言ったそうです。それほど人種差別法はひどいものだったのだと思います。しかしアンネは、最後まで希望を持ち続けていました。「すべての人が自分の死へと行進させられている」とまで言われた恐ろしい時代の中でも、アンネはあらゆる"美"のことについてだけ考え続け、ペーターへの恋心を育んでいました。私はアンネを尊敬します。当時十四歳のアンネ、つまり私と同じ歳だったアンネは、ユダヤ人弾圧に対する恐怖と日々の孤独に耐え、将来への希望と夢を持ち続けたのです。私だったら恐怖と孤独におかしくなってしまうと思います。私は勇気と信念のある心の美しいアンネを、心から尊敬します。

二年

アンネ・フランクの生き方について考えて、私は本当に強い人だと思いました。ユダヤ人はナチスに午後三時から五時までは買い物をしてはいけない、午後八時から午前六時までは外出禁止で自転車や車にも乗ってはいけないなど、いろいろなところで自由を奪われていました。アンネが常に不安ととなりあわせの生活で書き続けた日記に「希望があるところに人生もある。希望が新しい勇気をもたらし、再び強い気持ちにしてくれます」と記していたそうです。厳しい状況の中でも希望を見い出そうとしていたアンネ・フランクは本当に強いなと思いました。今の私はアンネとあまり変わらない年だけど、私がアンネと同じ状況に置かれたら少しの希望すら持てず、毎日恐怖におびえて泣いて暮らしていたと思います。そんなアンネが書いた日記の一言一言は世界中の多くの読者の心を打つほど、私にも重く感じられました。そして、もう二度

コクヨ　ケ-10　20×20

とアンネやユダヤ人たちのようにつらい体験
をする人がいないように努めなければいけな
いと強く思いました。

2年

アンネ・フランクのことを学んで、私は、衝撃を受けました。何の罪もないユダヤ人が迫害され、生きるという道が閉ざされてしまったからです。アンネの日記の一部を聞いてみて、隠れている間のさみしさや苦しみが伝わってきて、二度とこんなことがあってはいけないと思いました。

資料を見て、他の国が避難民に対し、ますます国境を閉ざしたと書いてあったのを見て、逃げられていたら、助かったユダヤ人も多くいるだろうと思いました。また、車や自転車、買い物、外出を制限されていたと初めて知って、とても驚き、自由がないユダヤ人の苦しみを感じました。アンネがあと一ヶ月生きていたら解放されていたと思うと、新しい人生を歩んでほしかったと強く感じました。

アンネは、とても一生懸命生きて、希望をもっていて、とてもすばらしい人です。アンネの生き方を見習わなければいけないと思いました。

柳南中二年

私は、アンネ・フランクはとても強い人なのだと思いました。今まで幸せに生きてきたのにユダヤ人というだけで差別され、隠れ住み、十四歳につかまえられてしまい病死というつらい人生をおくっています。アンネの言葉にもあったように苦難の人生で、隠れ家でもおびえてくらしていました。私は今、幸せで恵まれていると思います。しかし、もっともっとと思ってしまい自分より不幸な人なんてどうでもいいと考えてしまう気持ちがどこかにあります。今もたくさんの紛争や罪のない子どもたちがなくなっています。アンネの日記は、そんな理不尽な戦争の悲しみを表しているのだと感じました。日記を読んだときには私より一つ上の人が書いたものだとは思えませんでした。私が日記を書くときはあきてすぐやめてしまいます。しかしアンネがやめたのは、つかまってしまったからです。今までやめなかったということはそれだけ支えになっていたのだと思いました。

二年

　僕はアンネ・フランクの生き方について考えてみて、この人はとても強い人だったんだなと思いました。その理由は、どんなことからも逃げず、生きる希望さ捨てなかったからです。アンネは、隠れ家であるオランダにまでドイツが弾圧して来て家から一歩も出られず、銃でいつ殺されるのかと怯えていました。しかし、日記を書き続け自分の夢であるジャーナリストという大きな目標を追い続けていました。もし自分がこのような何かに怯えて生きる人生だったとしたら、おかしくなってしまうと思いました。だから、アンネはとても強い人だと思います。

　また、今回の反省からとても大切なことを学びました。それは、毎日あたりまえに朝起きてだらだらと一日を送くりあたりまえに寝ることがどれだけ幸せで価値のあることなのかということです。だから、僕は今ある幸せを忘れずに一日一日を大切に過ごしていきたいです。

2年

僕がこのアンネの日記を学習して心に残ったところは、十四歳の時の日記の中で不幸なことは考えずに、この世に存在する幸福について考えていたところです。その理由は、アンネ・フランクはナチスからの迫害を受け、本当の状況はつらく不幸ばかりの中で美や幸福だけを考えられる心の強さがすごいなと思ったからです。もし、自分だったら深く落ち込み頭の中で考える余裕もないと思うので、自分にはできないなと思いました。また、日記の最後の「幸福な人はだれでも、他人を幸福にするでしょう。勇気と信念のある人は、決して不幸の中では死にはしません。」の部分でアンネの人生の最後まで幸福を求め、悔いが残らないような生き方に感動しました。このアンネの日記の学習を終えて、今、身の周りにある幸福や美に感謝しアンネ・フランクのようなつらい中でも不幸なことを考えずに常に明るい方向に考える悔いのない生き方をしたいと思いました。

コクヨ　ケ-10　20×20

一年

私はアンネ・フランクの生き方について考えて、もし自分がと思うととてもつらくて日記どころではないなと思った。でも、アンネ・フランクは、マイナスをプラスに変えて、不幸を幸福に変えて、生活しようとがんばっているところがすごいなと思った。しかし、一九四四年に隠れ家が発見され、とてもこわかっただろうと思う。毎日、「銃で打たれるのではないか」とおびえていて、想像するだけでもこわいのに現実に起きたらその何倍もこわいだろうと思う。「私たちは皆、幸せになることを目的に生きています」という言葉を残している。この言葉をきいて、幸せになろうと努力していたんだと思った。だから、私もアンネ・フランクに対するユダヤ人迫害よりも不幸なことは起きずに生活、成長できると思うが、この言葉を心に刻んで、今生きている幸せに感謝したいと思う。

二年

アンネ・フランクの生き方について一時間勉強してみて、次のことを感じました。

まず、アンネが亡くなる一九四四年ギリギリまで日記を書いていたことを知ってびっくりしました。なぜなら、先が見えない、苦しい生活の中でアンネが力強く生きていたことを知ったからです。自分におきかえてみるとあんなに苦しい生活の中で希望をもつことはできないだろうし、まして「がんばって生きよう」とすら思えないと思うからです。授業が終わってからアンネについて調べてみました。すると、アンネは次のような言葉を残していました。「私の想像の翼は閉じ込められても、閉じ込められても、はばたき続けるの」「薬を10錠飲むよりも、心から笑った方がずっと効果があるはず」このような言葉から、アンネが笑顔を絶やさず希望を持って隠れ家生活をしていたと想像ができます。アンネの生き方をもっと調べていき、自分の人生の生き方の参考にしていきたいと思います。

コクヨ　ケ－10　20×20

二年

　自分が、アンネ・フランクの生き方について、この一時間で感じた事は、彼女の心の強さ、生きる事に前向きな姿勢です。自分がそう思った理由は、死ぬ最後まで、日記を書き続けたり、どんな時でも生きる価値や意味を忘れていないと思ったからです。いつ収容所に送られて、死ぬのか分からないという、彼女の置かれた状況で、うつむいて１日を送り過ごしてしまうような、絶望感で満たされてしまうような時も、立ち向かって希望を忘れず、冷静な思考で、毎日の日記を書き記すことは、とても自分ではできません。それに、パネルの飢えに苦しむ子供や、収容所に連れていかれる写真を見て、ユダヤ人にとって、「生」がないような環境にも屈しない姿にとても感動しました。だから、自分は、１日を大切に、自分にとって有効に使い、考える事をやめない、「生きる事」を大切に、自分なりに生きる価値を考える事ってとても大切だと感じました。

コクヨ　ケー10　20×20